



帳就社牧場事情書

1336



114
A 3830



第一磯石村牧牛ノ初

本郡

磯石村ニ藤田左九衛門ト云フ

者ノ離今百九十九年前(天和三年)

海濱ニ於テ塩ヲ焼キレバ需用ナ新

ク鯨送スル為メニ南部地方ヨリ三頭

ノ牛(北屯嶺 壯那嶺)ヲ齎シ来ルヨリ該村ニ牛

教漸次繁殖セリ然ニ薪ヲ鯨送運

搬スルヨリ外ニ使用ノ道ナキヲ以テ唯

壯牛ノミヲ畜有ニテ牝牛ヲハ悉ク同

郡小泊村ニ與エタリ然リ而シテ塩ヲ焼

大正十一年
天隈侯爵邸

クノ業全ク終リ續テ此牛左衛門死
去セル故ニ牝牛亦不用ニ畜スルヲ
以テ該右ノ畜有ラザルヲ西津輕和
追良瀬村外諸村ノ人共ニ與エタリ依
テ繁殖ノ道中途絶エタルニナラズ牝牛
牛地ヲ拂フヲ無キニ至レリ然レ氏牛左
衛門死去セル後数月ヲ出テスレテ該
村小野傳作ノ祖先傳作ト云フモノ
小泊村ヨリ更ニ牛ヲ北牝牽キ来リ依
テ居民共ニ牧畜シテ尔来順次繁殖セ

リ今日ニ至ルニテ其間繁殖ノ盛衰
アレ氏目下現ニ畜有スルモノ總テ八九
十頭ノ中數トナリ尤左衛門ノ家
ハ今ニ存シテ該村ニ居住セリ當時亦
祖先ノ名ヲ用弁テ牛左衛門ト云フ
外ニ分家十軒余アリテ在リトシテ皆
存在セリ

第二ニ在来牧牛ノ来意
磯松村牧牛スル来意在来者ヲ他ニ數
賣シテ村内一般ノ利益ヲ圖ラント

スル意志ナリ故ニ数十年前ヨリ秋田
物及西津輕初地方ヨリ牛ヲ買フ者年
々該村ニ来レリ尚村落殘レル畜有
ハ各自將々或ハ物品運送ノ使役ニ
供ス

第三年般用牧事業企タル趣旨

相田磯松田村ノ迄未耕地僅少ニシテ
人民悉ク不動産ニ就ク且河海ニ
桶魚ノ利ナク又山林ニ斧斤ヲ容ルハ
ニ由テ改ニ平常内地ニ於テ糊口

ノ策立タスシテ多クハ北海道殖産場ニ出
稼其漁獲ニ依リ僅ニ生活スル爲ナニ
一旦不獲ル中ハ俄ニ破産流離途ニ
身ヲ容ル地ヲ有レトスルモノ往々アリ而
村中半ニシテ数百軒迄ノ巨野アリテ
牧場ノ地収ニ適應セル故ニ刈收盛ニ
良種繁殖ノ後ハ居民亦ハ恒産ニ
就カレ然ラハ雖令北海道不墾ニ際ス
ルモ破産流離ノ患ヲ免ルニ足ルハ
ニ依テ而村台資共力亦社創立ス

ル所以ナリ

力四面本魚野ノ牧場ニ適應スル
地取ノ説

本郡守吉林相内磯野唐皮ノ地ヲ俵
合シテ本社牧場トナシ牧場ノ内ナレク
凸凹ノ地アレ氏南方吉林ノ地ハ十三
湖水ニ面シ北方磯松村落ニ近キタル
磯野ノ地ニ西面全ク海水ニ接スルヲ
以テ充分ノ水利ヲ有ノ吉野ト磯野
ノ間ニ相内ノ地アリテ十三村鎮ノ魚

野ニ接續セリ此地草生尤道ニ唐
皮ノ地ハ小泊街道ヲ隔テ東出ニ位
ニ磯松村落ノ山嶺ニ接ス元来地取ノ
全体ハ東出連山ヲ貫テ西ハ海面ニ臨
ミタリ加フルニ年々春雪早ク消シテ
彼岸ノ時節僅ニ一周間ヲ過クレハ畜
育ヲ悉ク魚野ニ放テニヨリ為ナニ
恙尾ノ期ハ最モ早シ如斯地所ナル
ヲ以テ牧場ニ適應スル所以ナリ
第五 彼岸事業ノ方法

本社株金ハ先々六百株ヲ以テ定度ト
ナレ共株金ヲ向後三年間ニシテ順
次繰積總株數ニ充ル規約アルノコ
トラス 目今縣廳ヨリ御貸金モ有之
尚不足ハ追テ別途株金募集シテ第一
洋種牝牛ヲ購求シ煩ラ逐テテ明春消
費ヨリ堤柵及牛舎建築シテ遂ニ牧場
ノ体裁ヲ完全スル見込ナリ

第六牛ノ取路

本社畜有ハ中西濃輕西郡及秋田各

二ニ長来取路アルヲ以テ向後亦該地
方ニ販賣スル目的ナリ

恒就社株主惣代

小山内鏡弥



明治五年九月



